

---

# ポケットモンスター ~お嬢様とレックウザ~

まどろみ猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター～お嬢様とレックウザ～

### 【NZコード】

N4861Z

### 【作者名】

まじろみ猫

### 【あらすじ】

無気力・無表情なお嬢様の、十六歳の誕生日。仕事で滅多に屋敷に帰つてこない父から送られてきた誕生日プレゼントは、伝説のポケモン・レックウザだつた！？ポケモンを持ったことなどないお嬢様、自分には資格がないと逃がそうとするが、人語を理解するどころか話すこともできるレックウザに気に入られてしまい…！？

自分の生きることに意味を見いだせなかつたお嬢様が、人と触れ合い命の大切さを学んでいく。ポケモンと人は、どのような関係であることが理想なのか？生きる意味は見つかるのか？

ジョウト地方での、知られざる少女の成長の物語。

## 誕生日（前書き）

ポケモンで、書きたいと願つておつましたまじりみ猫です。夢が叶つて嬉しいです。

私は少しでも上達したいので、よろしかつたら感想やアドバイスをお願いします。厳しいコメントも、自らの糧としていきたいと思っております。が、登場人物に対する批判はおやめください。至らぬ点は多々あると思いますが、よろしかつたらじっくりご覧ください！

私の名前はカノン。自分で言つのも何だが、お嬢様だ。外見は、そうは見えないだろうけど。

私の住んでいるジョウト地方は、なかなか住みやすい地方らしい。というのは、私はこの地方はおろか、自宅である屋敷からも滅多に出ないからだ。

出でることなどないし、したいこともない。だから、毎日の学習を終えると無意味に時間を潰す。昼寝をしたり本を読んだりピアノを弾いたりテレビを観たり…だらだらと、時間が過ぎていく。

両親もいない、友達もいない、ポケモンも持っていない私の話し相手は、屋敷で働くメイドさん達くらい。まあ、話すこともないけど。

「お嬢様。旦那様から、小包が届きました」

春の、日差しの心地よい午後。ソファに寝そべって惰眠を貪つていた私は、主であるパパに代わって屋敷を管理している万能執事・ラスターの声に目を覚ました。

「…ラスター。仮にも十五歳のレディの部屋に、ノックもなしで入ってくるなんて無礼じやなくて？」

眠い目を擦りながら、一応抗議する。

「ノックをしても、お返事がなかつたもので。それに、お嬢様はまだまだ子供ですよ」

ふふふつと含みのある笑い方。明らかに、私の発育を笑つていて。…まな板じや、子供扱いされてもしょうがないか。特に怒りもせずに、手を差し出す。

「そうね。私は子供ね。…パパから便りがあるなんて、珍しいわ」頂戴と、差し出した手。恭しく渡されたのは、綺麗にラッピングされた小さな箱。

「何かしら?…あら、カードがついてる

広げて、声に出して読む。ラスターも、内容が気になるだろ？から。「何々…『カノン、誕生日おめでとう！十六歳になつたカノンに、パパからプレゼントだ！きっと驚くぞ！カノンの誕生日を祝えないのが残念だが、パパはいつでもカノンのことを想つてゐるぞ！帰る日ができたら、連絡するからな！』…ああ、今日は私の誕生日だつたの？」

読み上げてから、ソファの横で控えるラスターに訊く。

「…お嬢様、ご自分の誕生日をお忘れにならないでください」

心底呆れた顔のラスター。若いが有能なこの執事、顔までいいのだから、よほど神様に愛されている。

ただラスターにとつて不運だつたのは、敬愛する主人に仕えることができず、私のような娘の面倒を見なくてはいけなかつたことだ。

「私の生まれた日に、何か意味があるの？」

生まれてきた日に、生まれたことに、何の意味があるというの？

「…お嬢様、旦那様が悲しまれますよ」

私の言葉の意味を察してか、ラスターは眉をひそめた。でも、それもどうでもいい。

そう、すべてがどうでもいい。私は何の為に生きているのか、わからずただ生きているだけなのだ。

無意味に、無氣力に。ただ、生きるだけ。

「…旦那様からのプレゼント、ご覧にならないのですか？」

『じろん、とまたソファに寝転がつた私。そのまま微睡むつもりだったのだが、ラスターの声に妨害された。

どうやら、『私が驚く』プレゼントに、興味があるらしい。

「ラスター、見たい？」

箱を渡そうとすると、首を振られた。私へのプレゼントなのだから、私が開けなくてはいけないのだそつだ。

「…わかつた。開けるわね」

普段無表情の私が、驚くものとはなんだろ？か？

「これは…モンスター…ボール？」

小さな箱に入っていたのは、見慣れた物体だった。ただし、変わった色の。

「紫色のボール…パパがいる地方では、これが普通なのかしら?」  
そつと持ち上げてみる。意外にも重い。

「ねえラスター。Wの文字があるわ…ってどうしたの?」

隣にいたラスターは、食い入るようにそのボールを見つめていた。  
と思ったら、その目が輝きだす。

「これはっ!…マスター…ボールですよお嬢様!」

「マスター…ボール…ポケモンを必ず捕獲できるという、幻のボール  
?」

トレーナーではない私だが、知識はある。この万能執事に叩きこまれた知識が。

「さすが旦那様!お嬢様の為にこんな希少なボールを入手されると  
は!」

ラスターが興奮し始めた。冷静沈着な彼は、パパが絡むと豹変する。  
「でも、このボール未使用なのかしら?」

「振つても、音はしない。それはそうか。

「それに、私ポケモンをゲットしたりはしないし…ラスター、あげる」  
渡すと、ポッポがタネマシンガンを食らつたような顔をするラス  
ター。と思ったら、狼狽して突っ返してきた。

「だ、だめですよお嬢様!…これは、旦那様からのプレゼントなので  
すから!」

優秀なトレーナーでもある彼なら、有効に使ってくれると思った  
のだが…。

「そ、そうです…マスター…ボールがプレゼントだとは思いますが、  
一応中身を調べなくては!」

…素直に、受け取ればいいのに。私は、要らないのだから。

屋敷には、ポケモン転送装置がある。一般家庭にはまずないが、

パパがお仕事で使っているのだ。

使つたことがないので、ラスターに操作してもいい。慣れた指捌き

でキーボードを打つと、装置に紫色のボールをセットした。

「中にポケモンが入つていたら、画面に名前と姿が表示されます。

…楽しみですね」

につこり微笑みかけてくるラスター。子供みたいだ。

「…では、お願ひ

「はい！」

たたたたつと、彼の長い指が素早く動いた。そして、画面に表示されたのは…

「…レックウザ。伝説の、ドラゴンポケモン?」

「…お嬢様！もつと驚いてくださいよおおおおおつー！」

まったく表情を変えない私に、ラスターがツッコむ。

「レ、レックウザですよー！？ホウエン地方で語り伝えられる、幻のポケモンですよー！」

ラスター、驚いてるわと思いながら、一ぐりと頷く。

「知つているわ。読んだ本に壁画が載つていて、こんな風だつたわ」「画面を指差す。長い筒状の鮮やかな緑の身体、一本の鋭い爪のついた手、これまた鋭い牙が生えた口。

「パパ、ホウエン地方にいるのかしら？」

「そこじゃないですよ嬢様」「…」

平静を取り戻したラスターに突つ込まれる。

「…それにしても、まさかレックウザとは…さすがです旦那様！このラスター、一生ついていきます！」

…まだ混乱しているようだ。

「…ラスター、ついてきてくれる？お庭で、レックウザをボールから出したいのだけれど…」

こんな状態の彼では正直頼りないが、屋敷で一番ポケモンの扱いに長けているのも彼なので、同行を頼む。

「…へつー？レックウザを、ボールから出すー？」

…それから、小一時間お説教が始まった。

## 誕生日（後書き）

読んで下せつた方、ありがとうございますー！

えー、なぜにレックウザ?と尋ねられれば、好きだからとしかお答えできません。可愛いですよねレックウザー。

シリーズ、ほのぼの、ギャグ、冒険、友情、恋愛…これらの要素を含めて、頑張りたいです。

他の作品も投稿していますので、よろしかつたら…その、そちらも…どうぞ。

## レックウザはお怒りのようだ (前書き)

お気に入りに登録してくださった方がいらっしゃったようで、驚きました。ありがとうございます!…でも、その…よろしかつたら、今後の精進のために感想を頂きたいな、と…。お願いします!上達したいのです私!

今回で、ようやくレックウザが登場します。…氷技で一撃、なんて言わないでくださいよ…弱点がないポケモンなんて、悪&ゴーストタイプだけです!

## レックウザはお怒りのようです

「よろしいですかお嬢様？伝説のポケモンとは、他のポケモンとは一線を画した存在なのです。その能力たるや凄まじく、天災を引き起こしたりもします。ポケモンをお持ちになつていなお嬢様が、このレックウザを従えるのは、不可能でしょ。なぜなら…」

「口をはさむ隙がない。かれこれ一時間は話し続けている。

「…ですから、レックウザをボールから出すのは、旦那様がお帰りになつたときでなくては。暴走した場合、このお屋敷は壊滅し、辺り一面は火の海になるでしょう。旦那様は、私など比較にならないほど優れたトレーナーでもあられます。その日まで待つて…」

「…やだ」

呟くと、ラスターの説教じみた説得は中断された。

「…お嬢様？」

「パパがいつ帰つて来るかもわからないのに、ずっとこのレックウザを閉じ込めておくの？私はこのレックウザを逃がしたい。このレックウザも、そう思つてははずよ」

紫色のボール。人からすれば夢のようなこのボールは、ポケモンからすれば悪夢のようなボールだろう。投げられたら、そこでお終い。パパがこのレックウザとバトルしたのかは知らないけれど、どれだけ悔しかつただろうか。

抗つても、強制的に押さえつけられ、捕獲される。そんなのは。

「…ラスター、教えてくれたわよね。ポケモンと人は、主従の関係ではなく、対等なのだと。お互いを認め合い、歩み寄り、協力するのが真の姿だと。…嘘じやないわよね？」

ポケモンの優れた力を、道具とみなし利用する人もいる。それは、知つてゐる。

「…私は、このレックウザと対等になれるような人間じやないの。トレーナーとしてどころか、人としても欠けている私には。だから

…

勝手なことを言つてゐるのは、わかつてゐる。パパは私の為にこのレックウザを捕獲し、私は私の考へでこのレックウザを逃がそうとしている。

私達親子の都合に振り回されたレックウザからしてみれば、たまつたものではないだらう。

「…お嬢様」

顔を上げると、ラスターが辛そうな顔をしていた。何で？

「わかりました。このラスター、お嬢様のお心のままに」

一礼すると、ラスターは私の手を取つた。

「…安心ください。お嬢様は、私がお守りします」

庭へと向かう彼に手を引かれている私は、その背中にこじむ覚悟に、罪悪感と感謝の念を抱いた…。

屋敷の使用人を全員避難させ、敷地内にいるのは私とラスターと、彼のポケモン達だけ。

「…まあ、お嬢様。ボールを投げてください」

緊張に顔を強張らせた彼。その隣で鬪志まんまんな、彼のライチ

ユウ。

「…」めんなさい。ラスター

こんなのは、執事の仕事じゃない。命を懸けてまで、彼が私に付き合つ「」とはない。

私一人なら、どうなつたってかまわない。でも、彼は違うはずだ。彼を必要としている人は、確かにいる。

謝つてすむことではないけれど、謝罪の言葉が勝手に出でいた。

驚きに目を見開く彼を横目に、ボールを投げる。全然とばない。数メートルの距離に落としたボールから、かつと光が発せられる。

「ぐおおおおおおおおおおおおん！」

轟いたのは、咆哮。あまりにも大きなその声に、耳を塞ぐ。

「ぐるるるるる…」

唸り声。巨大な伝説のポケモンが、目の前にいた。細長い筒状の身体は鮮やかな緑色で、黄色の輪のよつた模様がある。私を見つめる瞳は爪や牙と同じく鋭く、恐ろしい。

恐ろしい。けれど、何と雄大な姿だろうか。

私は、見惚れていた。その巨大で、美しい姿に。その、命の輝きに。

「貴様が、あの男の娘か？」

突如として頭の中で響き渡つた、若い男性の声。まさか、誰かいるの？

辺りを見回しても、目に入るのは綺麗に整備された庭と、レックウザと、ラスターとライチュウだけ。誰も、いない。

「お、お嬢様？どうされたのですか？」

レックウザを警戒しながらも、私を気遣うラスター。彼には、今の声が聞こえなかつたのだろうか？

「今、男の人の声が…」

「それは吾輩だ」

また、聞こえた。やつぱり、誰かいる。

「吾輩？…レックウザ、あなた話せるの？」

「ふん。話してはおらん。…まあ、テレパシーのよつたものだ。その男には聞こえておらんぞ」

ぶんつと尻尾を振ると、風圧が生まれて髪が乱れる。すごい風圧だ。

「吾輩の質問には、しっかりと答える。貴様が、あの男の娘かと訊いた」

「あの男？」

聞き返すと、苛立つたように尻尾を地面に叩きつける。どれほど

の力で叩いているのか、地面が揺れる。

「吾輩を、貴様が手にしたそれで捕らえた男だ」

それ、とはマスター・ボールのことだつ。惡々しげに紫色のボールを睨むレックウザ。

「…ええ。あなたを捕獲したのは、私のパパだと思うわ  
その瞬間。とてつもない殺氣を感じた。

「お嬢様！」

ラスタに腕を引かれ、私の立っていた場所にレックウザの尻尾が叩きつけられる。先程の比ではなく、地面が抉れた。助けてもらわなくては、死んでいた。

「…ありがとう、ラスタ」

「お礼など結構です！」

背後に私をかばい、ラスタがレックウザを睨みつける。ライチュウが、頬袋からビリビリと微かに放電している。

「…これしき、自らで避けることもできないか。貴様如きが、この吾輩を従えようなど笑止千万！」

向けられた視線には、侮蔑がこもっていた。テレパシーが通じていないうラスタにも、それがわかつたらしい。

「…お嬢様、レックウザは何と言つたのです？」

「…」の程度、自分で避けられないのか。貴様などが私を従えようなど、笑わせるな！…と言つているわ

レックウザの言つ通りなので、淡々と伝える。従えるつもりはなけれど。

「吾輩を従えるどころか、貴様のような虚ろな娘に仕えねばならんその男も不憫よ。あの男に仕えればよいものを…人間の、事情といふやつか？」

小馬鹿にしたように、レックウザが笑う。黒く縁どられた口が吊り上つたので、おそらく笑つたのだろう。

「…お嬢様」

通訳を、と目で乞われ、そのまま伝える。

「私を従えるどころか、貴様のような空っぽな娘に仕えなくてはならないその男も不憫だな。娘の父親に仕えればよいのに…人間の事情といふやつか？」…と言つてゐるわ

「…何ですって？」

ラスターの雰囲気が、変わった。…怒った、のだろうか？

「…伝説のポケモンだからって、好き勝手言つてくれますね。こんな人を見る目もない子蛇に、マスター・ボールを使う価値なんてありませんよ」

「何だと！？」

レックウザが、怒りの声を上げる。今しがたまで侮蔑を浮かべていた目は、憤怒に染まっていた。

「人を見る目がない、と言つたのです。お嬢様は、一見すると無気力で何もする気のないダメ人間のようですが、とても優しいお方です。そのことに気付きもしないあなたに、よく伝説なんて大層な呼び名が付いたものですね」

「ふん！ 優しいだと！？ 己の力もわきまえぬ人間が、偽善に酔つているだけであろうが！」

吐き捨てるように、レックウザは言つた。

「実に下らぬ！」

張り詰めたような緊迫感。のどかな庭にはまつたく似合わない。

「私は、戸惑つていた。ラスターの言葉に。優しい？ 私が？」

「お嬢様。この子蛇の通訳を、お願ひします」

戸惑う私そつちのけで、睨み合う両者。

「…えつと…優しさなど、己の力もわきまえない人間が、偽善に酔つているだけだ。下らない…ですって」

私の訳を聞いたラスターは、腕を組んで笑つた。

巨大な身体を見上げるその目にあるのは、勝ち誇つたような色。

「…やはり、人を見る目がありませんね。お嬢様は、自らの行為に酔いしれるような愚かな方ではありません。この方の真なる優しさを、そんな低俗なものと捉えるあなたのほうが、己をわきまえるべきですよ」

「…調子にのりすぎだ、人間！」

レックウザの怒りが、爆発した。通訳なしだが、ラスクにはその

咆哮の意味がわかつたらしい。

開戦の、咆哮。

「…上等です！私の主を侮辱したこと、後悔しなさい。」

「ひして、戦いは始まつた…。」

## レックウザはお怒りのようですが（後書き）

カノンお嬢様そっちのけで、レックウザとラスタが喧嘩してますね。正直言つて、彼の存在は一話限りでした。しかも、名前なしのただの執事です。ですが、話を進める上で彼の存在が必要になつてくることに気が付き、こうして立派な主要人物となりました。考えた人物は全員好きですが、彼もなかなかお気に入りです。

今のところ、人物の容姿の描写はなしですが、これから的话でいきます。現在わかるのは、カノンお嬢様がまな板ということぐらいでしょうか（笑）。

ポケモン大好きなのにバトルは苦手。こんなまどろみの作品ですが、楽しんでいただけたら嬉しいです！

## 見たくないの（前書き）

「めんなさい、ラスタ。2話でのキミの名前、間違えました。  
ラスク？誰それ、です。後書きで「お気に入りです」とかどの口  
が言うのでしょうか。」反省します。

えへ、何故か私が投稿しようとするトピックになります。ので、  
書きあげているのに更新できないという事態が起るかもしませ  
ん。」投稿したいのですよ！？まどろみは！

「お気に入りに登録してくださった方、お読みになつてくださつ  
た方、ありがとうございます。私は小説が大好きですので、これか  
らも頑張っていきたいです！」

## 見たくないの

「ぐりえ！」

レックウザの口から放たれた、『りゅうのこぶき』。

「ライチュウ！『まもる』！」

「ライツ！」

ラスターの指示に、即座に従うライチュウ。瞬時に球状の壁を展開し、身を守る。

「小癪な！：叩きのめしてくれる！」

防がれたレックウザは、尻尾をゆらりと振った。振られた尾が、鋼の輝きを帯びる。

「ライチュウ、『10まんボルト』！」

「ラツ…」

応え、身体から電気エネルギーを放とうとするよりも早く、

「遅い！」

レックウザの尾が、ライチュウを吹き飛ばした。おそらく、『たきつける』ではなく、『アイアンテール』。

「ライチュウ！？：すまない、戻れ！」

植え込みで戦闘不能状態となつたライチュウを、ボールに戻すラスター。得意げなレックウザを、悔しげに見据える。

「…むつ！？：身体が…！？」

そのとき、レックウザの動きが鈍くなつた。にやりと、ラスターが笑う。

「…『せいでんき』。ライチュウの特性です。物理攻撃してきた相手を、麻痺させる…運がないですね」

好機とばかりに、モンスター・ボールを投げる。現れたのは、ジゴン。

「許さぬぞ！人間！」

麻痺したというのに、レックウザの闘志は衰えない。それどころ

が、ますます怒り、高まっている。

「通訳は結構ですよ、お嬢様！：ジユゴン、『ねこだまし』！」  
ジユゴンが、小さな手を叩く。びくりと、レックウザの巨体が怯む。

「今です！『れいとうビーム』！」

氷タイプの技は、ドリゴン＆飛行タイプのレックウザには効果抜群。大ダメージを受ける。

ただしそれは、『当たれば』の話だ。

「…馬鹿な！麻痺してなお、これほどの速さで動けるとは…！」

『ねこだまし』の追加効果で怯んだレックウザだったが、発射された『れいとうビーム』を飛んで回避してみせた。

「…はっ！伊達に伝説と呼ばれておらんわ！」

驚くラスターを嘲り、麻痺したとは思えない速度でジユゴンを翻弄するレックウザ。

「ジユゴン！『レジン』れるかゼ』！」

「甘いわ…」

広範囲の氷技に、すかさず上空に飛び上がって躲したレックウザは、

「恨むならば、吾輩に刃向つた愚かな主を恨め！」

急降下して、ジユゴンを鋭い爪で切り裂いた。

『ドラゴンクロール』。完璧に、決まった。

しかしジユゴンは、倒れなかつた。

「なつ…！？」

レックウザは驚き、動きを止めた。

今にも力尽き、倒れそうな、ジユゴンの間近で。

「最大パワーで『ふぶき』！」

「ジユゴンオオン！」

瀕死の状態で繰り出される、ジユゴンの『ふぶき』。

「ぐおおおおおおおおおお！？？」

吹き荒れる『ふぶき』。その威力は凄まじく、庭の木々が全て凍

りつき、私は余波で吹き飛ばされそうになつた。

視界が白で覆われ、何も見えなくなる。が、レックウザの苦悶の咆哮ははつきりと聞こえた。

「…やめて」

私の声など、その苦痛の叫びにかき消される。

「ジユゴンー？ しつかりしなさい！」

視界が晴れ、私の目に映つたのは、傷つき倒れたジユゴンと駆け寄るラスターの姿。

「…はつ、…はつ…」

そして、荒く息をつくレックウザ。かなりのダメージを負つているようだ。

それなのに、瞳に宿る闘志は微塵も薄らいでいない。

「…ありがとう、ジユゴン。よくやつてくれました」

ボールにジユゴンを戻し、レックウザと向き合つラスター。その手には、すでに三体目のモンスター・ボールが握られている。彼の目にも、戦うという決意があつた。このレックウザに向しても打ち勝つといつ、強い決意が。

…私は、何をしているのだろうか。一番の当事者であるはずの私が、傷つくこともなく傍観しているなんて。

「…なかなか根性のあるジユゴンではないか。驚かされたぞ」

にいと笑う、レックウザ。身体は、ぼろぼろだ。

「そちらこそ、私のジユゴンの『ふぶき』を受けてまだ立つているとは…さすがですね」

賛辞に賛辞で返すラスター。三体目のボールを握る手が、震えている。

…それは怒りか、恐怖か、悲しみか、武者震いか…。

わからない。レックウザの言つ通り、空虚な私には…だけど。

「…いや」

もういやだ。これ以上、傷つくところを見るのは。

このまま戦い続ければ、失つてしまいそうな気がする。…大事な何かを。

「やめて！ラスターもレックウザも、もうやめて！」

「やかましい！引つ込んでおれ、小娘！」

張り上げた声も、レックウザの唸りに近い怒鳴り声で一蹴されてしまう。

「お嬢様、危険ですからそこにいてください」

レックウザが止まらない限り、ラスターも止まる気はない。静かに言つと、ボールを振りかぶつた。

いけない。また始まってしまう。

私は、駆けだしていた。衝動的に。

頭にあるのは、止めなくてはという想いだけ。

「…血迷つたか小娘」

ラスターは、はるか後方にある私が駆け寄つて来ていることに気付いていない。

そして、レックウザの言葉は私にしかわからない。

レックウザの尾が、揺れる。

来る！

そう感じ、振り下ろされた尾を間一髪回避する。…レックウザが麻痺していなければ、躲すことなど到底不可能だつただろう。

「ほう…」

レックウザの目がわずかに見開かれ、

「お嬢様！？」

振り返ったラスターが、悲鳴に近い声で私を呼んだ。

「ラスター！命じます、動かないで！」

モンスター・ボールを投げようとした彼を止め、そのまま走る。手にあるのは、マスター・ボール。

「小娘、貴様何を…」

「…そこまでよ、レックウザ！」

レックウザの言葉を遮り、マスター・ボールを向ける。

「戻りなさい、レックウザ！」

私の声とともに、ボールから放たれた赤い光線がレックウザに当

たつた。

「貴様」

ボールに戻される寸前、レックウザは私の目を見て…笑つた。  
怒りでも驚きでもない…その目にあるのは、もつと別の…。  
緑色の巨体が消えた庭に転がっていたのは、一個の紫色のボール  
だった…。

## 見たくないの（後書き）

…まだ旅立ちもしないなんて…進行の遅さに愕然とするまどりみです。オリジナルキャラばかりで、公式のヒロキくんや「コネちゃんが出てきません。これはまずい！」

「…私では、役不足?… そうよね」

つてああ！？カノンお嬢様が心な

つてああ！？カノンお嬢様が心なしかがつかりしておられる！？  
「まどろみさん…私の名前を間違えただけでなく、お嬢様をがつか  
りさせるとは…覚悟はできていますか？」

作者・あとでみ猫

「近いうちに、私達にも出番があるってことね！」

「ふん。別に、どうでもいいけどなー」

## 気に入った！（前書き）

はい、前回の後書きでラスターさんに追っかけられたまどろみ猫です。…バトルの描写は難しいです。このお話は、お嬢様の人として、トレーナーとしての成長を描きたいので、バトルはあまりしません。それでもいいよという方は、どうぞお読みください。

## 気に入った！

屈んで、マスター・ボールを拾つ。

「…お嬢様！…無事ですか！？」

ゆっくりと、駆け寄ってきたラスターの方を向く。

「…ラスター」

急に、足から力が抜けた。どうしてだらうと寄観的に考えていると、ラスターが抱きとめてくれた。

「ラスター、大丈夫？ 怪我とかしていない？」

ポケモンバトルでは、技に巻き込まれてトレーナーが大怪我をすることだってある。心配になつて訊くと、

「……こちらの台詞ですよ、カノンお嬢様…！」

ぎゅっと、抱きしめられた。…よかつた、怪我はしていないようだ。

「お嬢様の身が危ういのに、動くななど……もう一度と、あんな命令はしないでください…！」

抱きしめてくるラスターの腕は、強くて、絞り出すような声は、泣き出しそうで。

「…うん。」「めんなさい…」

私は、謝つていた。

ラスターを、苦しめてしまつたと気付いたから。

自己嫌悪、といつものがある。今の私は、正にその自己嫌悪中だ。

『戻りなさい、レックウザ！』

…何だ、あの言ひ方は。あれではまるで、私がレックウザのトレーナーのようだ。

…私に、トレーナーの資格などないのに。

「お嬢様、御気分はいかがですか？」

…一つの間にか、ラスターが部屋にいた。心配そつて、ベッドで寝て

いる私を窺う。

「…良くは、ないわ。私、レックウザに命令してしまったから  
身体を起こして、膝を抱える。平らな胸だと、この姿勢はどうや  
すいのだ。」

「…レックウザ、怒っているでしょうね」

ナイトテーブルに置かれた、マスター・ボール。ランプの明かりを  
受け、妖しい紫色に輝いている。

「あんな偉そうなこと言つておいて…ライチュウもジユゴンも、レ  
ックウザだつて傷ついた。みんな、私のせいだわ…」

膝に、顔を伏せる。申し訳なくて、ラスターの顔が見れなかつた。  
「…お嬢様。やつぱりあなたは、お優しい方です」

「どんな顔をして、そんなことを言つのか。

「やめて…私は、優しくなんてないわ」

顔を伏せたまま、言つ。胸が、苦しい。

「…やさしく、なんか…！」

ぐつと、溢れてきそうになるものを押さえつける。無理矢理に。  
泣かない。泣けない。私に、涙なんてないはずだもの。

「…出て行つてラスター。一人に、してちょうどだい」

そう言わなくては、彼はここに居続けるだろうから。…居たくも  
ない、はずなのに。

「わかりました。カノンお嬢様、お休みなさい

「…おやすみ、ラスター」

ドアが、静かに閉められた。

案の定、私の両目から涙が零れることは、なかつた…。

カノンお嬢様は、独りを望まれている…。

出て行けど、命じられたならば。その通りに、しなくてはならな  
い。

たとえ私が、お傍にいたいと願つても。お嬢様が、それを望まれ  
ないなら。

静かにドアを閉め、私はため息を吐く。無性に、悲しかった。

「…旦那様」

何処か遠い地におられる、敬愛する主人に思いを馳せる。の方なら、お嬢様のお心を癒すこともできたのに、と…。仕方のないことだと、わかっている。の方は、『ご多忙なのだ。『カノンを、頼んだぞ。無気力で無表情で無感情だと思うかもしれないが、そんなことはないからな』

五年前。屋敷を出て行かれたきり、旦那様は戻らない。

…最初は、旦那様の為だった。『ご命令だから、お嬢様のお傍にいた。嫌では決してなかつたけれど、本音を言えば旦那様に付いて行きたかつた。

それが、いつしか変わった。お嬢様の、お傍にいたいと切望するようになつていた。

「…お嬢様」

ドアの向こう側で、あなたは泣いているのですか？ そうだとしても、私は…。

ここから、動くことができないのです。あなたの、『ご命令がない限り。

「娘よ！ 吾輩は貴様を気に入つたぞ！」

目を細め、穏やかに私を見るレックウザ。昨日の敵意はどうへいつたのか。

「…ありがと」

屋敷は、ジヨウト地方の孤島にある。孤島といつてもそれなりの大きさで、山もあるし湖もある。

パパの、所有地だ。住んでいるのは、元からこの島に生息していた野生ポケモンと、屋敷の使用人さん達だけ。

「…薄い反応だ。もつと喜べ！」

私の反応が不満だつたらしく、レックウザは低く唸つた。

「これでも、喜んでいるのよ？」

屋敷の裏山。少しひらけた場所で、私とレックウザは向き合っている。時折木々が揺れるのは、珍しい訪問者を見物しに来た野生ポケモンがいるのだろう。

「… そうか？ ならばよい！」

尊大な態度で言つと、レックウザは私の目の前に下りてきた。見上げていると首が疲れるので、正直ありがたかった。

「… 娘、昨日の発言を撤回しよう。… すまなかつたな」

… 何故、私が謝られているのか。謝ろうと、思ったのに。

「レックウザが、私を空っぽつて言つたこと？… その通りだから、謝ることなんてないわ」

そう言つと、レックウザはぐるぐる… と唸つた。どこか、悔しげに。

「わからないのか、娘？ 吾輩が間違つていた。貴様は、虚ろなどではない。… 虚ろな者に、あるよつな目はできぬ」

どうして、わからぬのか…。どうやら、私がレックウザの言つ事を理解できないのが悔しいらしい。

「吾輩の一撃を避け、単身吾輩に向かつってきた貴様の目は、生き生きと輝いておつたぞ？… 吾輩は、貴様の目に魅せられたのだ！」

じいいっと、至近距離で見つめられる。… そんなことを、言われても。

「… 吾輩の身体に近い、あの空のように澄んだ翠の瞳… あのときの貴様の目は、美しかつたぞ？ あの目見たのが吾輩だけというの、何とも嬉しいことだな！」

言葉通り、レックウザは嬉しそうだった。地表から数メートル浮かび上がって、長い巨体をくねらせ飛行する。

木々に囲まれた、空。天空の化身と呼ばれるレックウザには、狭すぎただろう。

「… いらっしゃい、『めんなさい』。私達親子の都合に付き合わせて…

身体も、心も。傷付いただろう。

「身体も、心も。傷付いただろう。…

「そのようなこと、伝説と呼ばれし吾輩達には日常だ。娘が気にすることではないよ」

飛行を止め、優しい田で、レックウザは言つ。

「…遙かな昔から、吾輩の強大な力を欲する人間と、戦い続けてきた…。だが、あの男は違つた。あの男が望んだのは、『吾輩と、娘がトモダチになること…』」

あの男とは、パパのこと。

「初めて貴様を見た時は、冗談ではないと思ったが、今では、悪くないと思つておる」

首を振る。それでは、ダメだ。

「私には、あなたといる資格はない…私には…」

俯いた私に、

「な、泣くなよ！？」

慌てたレックウザが、声をかける。

「資格など、必要なからう！？吾輩が勝手に貴様の傍にいると言つたのだ！…だから、その…難しく考えるな！…これから人間は…」…わたわたと忙しなく飛び回るレックウザの影が、地面に映る。

「…泣いて、ないわよ…。レックウザ、ありがとう」

顔を、上げる。こんな私を、慰めようとしてくれるレックウザの気持ちが、嬉しかつた。

「…何だ。娘、そんな風に笑えるのではないか」

にっこり、レックウザが笑つた…。

## 気に入った！（後書き）

ポケモンは道具ではない！… そつであるかはトレーナー次第だと思います。対等？そんなのありえないところのも、また一つの考えです。

ポケモンとはいつの存在であるところのは、トレーナー自身が考え、決めることだと思います。悪だの善だの、そんなものは幻想にすぎません。絶対なる悪も、絶対なる善も、存在しないのです。それが、私の考え方です。

読んで下さった方、ありがとうございました！

## 狙いぐる者（前書き）

初めて買つてもらつたポケモンは、金・銀でした…。赤・青・緑は姉の世代です。私は金、妹は銀を買つてもらい、仲よく遊びました。…懐かしいです。

しかしです。それ以降の作品もプレイし、さまざまポケモンを育ててきたまどろみ猫も、どんな技を覚えるかはいつも覚えです。そのため、一番末の妹が持っている攻略本に頼ろうとしていたのですが…売り払われていました。

だから、今日買つてきました！ポケモンの図鑑、見ているだけで楽しいです！

## 狙いくる者

「…娘よ、名は、何と言つのだ?」

吾輩は、この変わつた娘に名を尋ねた。まさか、吾輩が人間に興味を持つ日が来ようとは…。

「カノンよ。レックウザに、名前はあるの?」

吾輩の名…そんなものはない。一匹で生きる吾輩には、必要なかつたのだ。

「ない。…カノンよ、貴様が吾輩の名を付けよ」

この娘なら、名付けられてもよい気がする…。

「いいの?…うーん…」

しばし、真剣な顔で考え込む娘。今更ながらに気が付いたが、この娘、なかなか可愛い顔をしている。

やけに必死になつて娘を守ろうとしていたあの男。名は確か…ラスターと言つたか?…ほほつ。そういうのも、面白いやもしれぬな。などと考えていると、

「レッシー!レッシーでどうかしら!?」

娘：カノンが、昨日とは違う輝きに満ちた瞳を、吾輩に向けた。

…レッシー?

がぱつと、顎が外れそうになる。…開いた口が塞がらないとは、正にこのこと。

「…すまぬ。レッシーだけは勘弁してくれ…!」

純真な瞳から目を逸らし、吾輩は嘆願する。レッシーだけは、何としても回避しなくては!

「…気に入らなかつた?レックウザ…」

しょぼんと、落ち込むカノン。一生懸命考えてくれたのだらう。罪悪感がずきずきと痛んだが、それでも!

「…すまぬな」

レッシーは、レッシーだけは!

「わかった…。『ごめんね、レックウザ』  
頃垂れるカノン。どうすればよいのか…話題を、変えればよいか  
!?

「…」  
「…」

「…」  
「…」

「…」  
「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「旅…旅すれば、私は…」

カノンも、空を仰いだ。囁きが、吾輩にも聞こえた。

「…変われる、かしら…？」

「変わるとも。そう願い、行動すれば  
ほとんど思いつきだつたが、なかなかいい案ではないか？カノン  
も、元気になつたようだし。

…流石だな、吾輩！

得意になつていると、そつとあたたかいものが、吾輩の背を撫で  
た。何だ？

「…ありがとう、レックウザ。私と一緒に、旅に出てくれる？「  
あたたかいものは、カノンの小さな手で。遠慮がちな、微笑みを  
浮かべて。

…まったく、変わった娘だ。

「よからう。吾輩とカノンは『トモダチ』だからな！」

以前の吾輩ならば、そんなことは欠片も思わなかつただろう。元では、そうありたいとまで思つてゐるのだから。

「…レックウザ、発見！捕獲作戦開始！」

穏やかな空気を乱したのは、人間。

「…飛ぶぞ、カノン！」

「きや！？」

本能で危険を感じ、カノンを掴んで上空へと逃れる。手の中のカ

ノンを潰さないよう気を付けながら、地表に目をやる。

先程まで、吾輩達が立つてゐた場所に『れいとうビーム』が放た  
れていた。

直感に従つていなければ、直撃だつただろう。

「レックウザ？急に、どうしたの？」

手の中のカノンが、事態をわからず尋ねてくる。

「…敵だ。吾輩を、捕らえようとしている」

答えた声が固くなつたのは、カノンの存在を再認識したからだ。

…」のままでは、応戦できない。

「連續で『れいとうビーム』と『10万ボルト』だ！絶対当てる！」  
考える時間も与えられずに、地表から技が放たれる。躲しながら、  
吾輩は更に上空を目指そうとして…やめた。

吾輩は、大気圏でも生きられる。しかし、カノンは？人間の身が、  
上昇して耐えられるのか？

…わからないなら、すべきではない。そう判断し、回避を続ける。

「…飛行部隊！その娘を狙え！トーレーナーだ！」

敵の怒鳴り声。…飛行部隊だと！？

首を巡らすと、こちらに向かってくる無数の黒い影。

「…『ゴルバット』だわ」

流石の我輩も、カノンに目を向ける余裕はない。地上からの技と、  
大量のゴルバットの『エアカッター』を回避しつつ、この状況を打  
破する方法を考える。

どうすればよいのか。今は何とか躲せているが、いずれ当たる。  
だが、反撃しようにもカノンが手の中にいる。…戦いにくらいし、危  
険だ。

逃げ出そうにも、すでにゴルバットの群れに囮まれている。強行  
突破も考えたが、それもカノンのことを考えると…。

「…レックウザ、私に考えがあるのだけれど…」

ハ方塞の我輩に、遠慮がちに声をかけるカノン。

「考え！？どのような考えだ！？」

ますます激しくなる攻撃。手を講じなくてはと焦る吾輩に、カノ  
ンが提案する。

「…駄目だ！危険すぎる…」

しかしそれは、『吾輩』ではなく『カノン』が危険にさらされる  
作戦だった。

「ぐつ！？」

「レックウザ！？」

気が逸れ、不覚にも一撃もらってしまった。不幸中の幸い、『れ

「いとうビーム』ではなかつたが。

「おー当たつたぞ！もつと当てて弱らせんー。」

オニードリルに乗り、ゴルバット達を指揮する男が言つ。…調子にのりおつて！

「…でも、このままじゃレックウザが…私のことなら、気にしないで！」

必死に、カノンが言つすぐる。自身より、吾輩の身を優先するとは…。

こんな状況にも関わらず、笑みが浮かぶ。…尾に、痛みが走つたが、大して気にならない。

「…わかつた…良いのだな、カノン？」

手の中の娘。その目に恐れの色はなく、吾輩が魅せられた煌めきがあつた。

「ええ！…いくわよ！」

頷き、カノンは紫色のボールを、吾輩へと向けた…。

## 狙いぐる者（後書き）

お読みください、ありがとうございます！今日はレックウザ視点です。彼（伝説のポケモンであるレックウザに性別はありませんが、オスっぽいので彼と呼びます）は、今まで見てきた人間とは違う力ノンお嬢様に、自分でもよくわからない感情を抱いています。…なにやら、誤解を招きそうな表現ですが、これからカノンお嬢様とレックウザは絆を深めていくのです。

レッサー…可愛い名前だと思うのですがねえ…？  
構想はあらかたできているのですが、何分時間がなくて…不定期になってしまふかもしれません。ごめんなさい！  
…ペンドラー可愛いですよペンドラー…（ぼそり…）。

…仕方なかつて…『はかこ』いつせん』、決め技であらつて…? (前編)

…頑張りました! 睡眠時間? そんなのどうでもいいのです! 書きたかった! 書けた! 嬉しいです!

妹に、技を漢字で書かないのかと訊かれました。: ひらがなは『ださい』 そうです。漢字で書くと、だいぶ感じが変わってしまうのですよ! だからです!

…仕方なかうつー『はかじじつせん』、決め技であうつー？

私を掴んで飛行していたレックウザを、ボールに戻す。当然、私は落下する。

しつかりとマスター・ボールを握り、真っ逆さまに落ちて行く。私達を取り囲んでいたゴルバットが、オニードリルに乗った男性が、驚いているのが見えた。

「気は確かか！？ だがチャンスだ！ ゴルバット・マスター・ボールを回収しろ！」

男性の指示に従い、ゴルバット達が私の手にしたマスター・ボールを目指して降下する。

… そう。『私』を目指して『一直線』に。

笑みが、こぼれた。この高さから地面に墜落すれば、命はない。けれど、それでも私は、笑っていた。

地上からの攻撃は止んでいる。何もせずに、ゴルバット達がレックウザをゲットするのを待っているのだろう。

風を切り、重力に従う身体。腕を少し動かすのも大変だった。

「…レックウザ！ お願い！」

何とか腕を真上に向け、ボールの開閉スイッチを押す。

「任せよカノン！ …くらえ！」

現れた、巨大なドラゴンポケモン。大きな口を開いて、吼える。

「しまつた！ ？ 散れ、ゴルバット！」

男性が指示するも、時すでに遅し。

レックウザの口に集束した光線が、一直線に降下していたゴルバット達を消し飛ばす。

「…『はかいこうせん』」

圧倒的なまでの威力。一掃されたゴルバット達。それは計算通りだつたけれど。

「…反動で、動けなくなるのよね…」

現在も落下している私。固まつたレックウザが遠のいていく。  
もうすぐ、地面に激突する。…恐怖は、ないけれど。

ラスター…私のこと、忘れちゃうのかな…。

レックウザは、空虚じやないって言つてくれた。それなら…

残れば、いい。彼の中に、少しでも。

私が…どこまでも、身勝手ね。

目を閉じる。最後に見られたのは、雲一つない空と、焦げて落ちて行くゴルバットと…レックウザ。

私の、初めての『トモダチ』…。

「カノン！」

…レックウザ？

ふわりと、優しいものに包まれる。落下が、止まる。

鮮やかな縁が、目に入った。

「…間に合つたか！胆を冷やしたぞ！」

「あれ？…レックウザ？」

私は、レックウザの手の中にいた。…助かった、よつだ。

下を見ると、地面まで数メートル。

「ゴルバット共は倒したぞ！待つておれ、残つたあやつらを…お…」

レックウザが、驚きの声を上げた。何だろうと首を巡らせると…。

鬼が、いた。

「…あやつら…哀れな…」

遠い目をして、レックウザが呟く。そつと、私を地上に下ろしてくれた。

「…ラスター…！」

鬼が、につこつと笑う。

「お嬢様…お姿が見えないと思えば…」

立ち上る怒気。顔は笑つてゐるが、目が笑つてゐない。

「お説教は後です。…この不法侵入者一人を、ジュンサーさんに突き出してからたっぷりとして差し上げます」

ルージュラとエレブーを従えた男性と、オードリルに乗った男性。「ど、どうする！？」

「…何かヤバそうだ！逃げるぞ！」

怒るラスターに逃げ腰となつた一人を、

「逃がしません」

軽く放られた、三つのモンスター・ボール。フシギバナ、カメリックス、リザードンが、一人と三匹のポケモンを睨み据える。加えて、こちらにはレックウザもいる。男性達の顔から、血の気が引いていく。

「さあ…お仕置きの時間ですよ？」

爽やかに、ラスターが言った。

男性達の悲鳴は、島中に響き渡つたといつ…。

「…どうして、私に声をかけてくださらなかつたのですか？」

抑えた声でそう言うラスターは、私を見ていない。

「…昨日、レックウザをボールに戻せたのは、運がよかつたからです。そんなこともわからないお嬢様ではないでしょ？」

ぼろ雑巾と化した男性一人と、戦闘不能となつた三匹のポケモンをジュンサーさんに突き出し、ラスターのお説教が始まった。

相当怒つている。見上げているのに、目も合わせてくれない。

レックウザは、神妙な顔で私達を見守つている。…遠い。

「わかつていたけど…でも、ラスターは忙しいでしょ？邪魔しちゃいけないと思つて…」

「そんな気遣いは無用です！」

私の言葉を遮り、ラスターが怒鳴る。

「お嬢様は、わかつていらつしやらない！私はお嬢様をお守りするためにはいるのです！それなのに、私に黙つて屋敷を抜け出して、あんな危険な真似をして！…レックウザが間に合つたから良かつたもの、一歩間違えば死んでいたのですよ！？」

「いや、それはカノンが悪いのではない！カノンは『りゅうのはど

う』がよいと言つたのに、吾輩が『はかいこうせん』を…  
私をフォローしようとしたレックウザだが、

「レックウザは引っ込んでいてください！」

ラスタのものすごい剣幕に、ぐつと唸つて引き下がる。

「…ごめんなさい。私に何かあれば、ラスタがパパに怒られてしまふわね」

考えていなかつた。ラスタは、私の面倒も任されていたのに。

「…違う！」

「！？」

激昂したラスタに、肩を掴まれた。…痛い。

「違う！ そうではないのです！…私は！」

肩に、ラスタの指が食い込む。痛い。

「私は！ お嬢様をお守りしたいのです！ お嬢様の、その自分の身を顧みない行動が、どれだけ私の心を抉るか知っていますか！…旦那様は、関係ありません！ 私は、私の意思でお嬢様をお守りしたいのです！」

理解できない。パパを抜きにして、どうしてラスタが私を守るうつするのか。

「…わからないわよ…！ なんで…？ どうして…？」

ますます力のこもる指が痛い。怒鳴るラスタが怖い。上空から落下するよりも、ずっと。

「…わからないわよ…！」

目頭が、熱くなつた。何かが、溢れてくる。

「…？ ラスタ！ カノンを泣かせたな！？」

レックウザが吼える。…泣いている？ 私が？

ラスタが、狼狽する。肩にこもつていた力が、抜けた。

「…カ、カノンお嬢様！？」

おろおろと、ラスタが覗きこんでくる。

「…ラスタ、私、泣いているの？」

目元を触ると…濡れて、いる。

「はい！…お嬢様が泣かれるところなど、はじめて見ました…」

微笑むラスター。どこか、嬉しそうだ。

「…どうして、嬉しそうなの？」

ついせつきまで、あんなに怒っていたのに。

「お嬢様が、ご自分の感情を露わされたからですよ…申し訳ありません、痛かつたでしょ？」

「…痛かつたけど…いいの。ラスターが、笑ってくれたから」心配をかけてしまった。そこまで、私のことを思つていてくれたなんて、知らなかつた。

「…っ！ありがとう、『ござ』います…！」

…あれ？ラスターの顔、ちょっと赤い…？

…熱でも、あるのだろうか…？

…仕方なかれ!…『はかこ』はせん、決め技であれ!…? (後書き)

『はかこ』はせん…!…アニメで観るとかっこいいですよね。

…時間ないです。仕事行かなくては…。仕事中に、アイディアが湧くこともあるので、頑張りたいです。…『人』を見たくはないのですがね。

…『見になつて下さつた方、ありがとうございました!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4861z/>

---

ポケットモンスター～お嬢様とレックウザ～

2011年12月21日16時49分発行